日本体育大学紀要（Bull. of Nippon Sport Sci. Univ.），41 (1)，111–116，2011

【短　　報】

大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連

清水聖志人[1)]，島本好平[2)]

[1)] 日本体育大学スポーツトレーニングセンター

[2)] 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

The relationship between career development and life skills acquisition in top student athletes

Seshito SHIMIZU and Kohei SHIMAMOTO

(Received: June 20, 2011 Accepted: August 31, 2011)

Key words: career transition, life skills, top student athletes, wrestlers

キーワード：キャリアトランジション，ライフスキル，大学生トップアスリート，レスリング競技者

1. 諸　　言

近年，トップアスリートのキャリア問題に関する関心が高まっている。我が国のトップアスリートのキャリアを取り巻く環境は，経済的な低迷，産業構造の変化，競技の高度化，国体強化を目的とした教職員としての採用の衰退といった問題から大きな変化が起こっている[1–3)]。この影響は，大学生トップアスリートの就職にも波及している[4)]。2008 年秋に起こったアメリカのサブプライムローン問題は，この状況に拍車をかけている事が考えられる。景気が失速すれば，雇用調整が進み，新規学卒者の就職状況が厳しくなる[5)]。実際に，厚生労働省が発表した「平成 22 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査」[6)] によると，平成 22 年度の大学卒業者の 10 月 1 日時点の就職内定率は 57.6% と前年度の同調査結果 62.5% を大きく下回っている。この数字は，就職氷河期と言われた 2003 年の同時期の同調査 60.2% をも下回っており，大学生全体の就職率の低下が深刻な問題となっている。一般の大学生に比べ，トレーニングや試合，遠征等で時間的な制約が生じる大学生トップアスリートは，就職を得る事がさらに困難になっている可能性は高いと考えられる。また，日本のスポーツを支えてきた「企業スポーツ」は，大学生トップアスリートの就職先としても大きな役割を果たしてきた。しかし，企業スポーツはクラブを所有する企業の経営状況を受けやすく，90 年代のバブル崩壊の影響を受けて休・廃部が続いた。企業クラブの休廃部数はサブプライムローン問題後，再び増加傾向にあり，大学生トップアスリートの就職をさらに困難にしていると推察される[7)]。

加えて，大学生トップアスリートのキャリア形成を困難にしている要因として挙げられるのが「スポーツを利用した大学の経営戦略」である。社会の注目を集める一流の大学生トップアスリートは，メディアへの露出が高く大学の広告戦略として重要な媒体となっている[8)]。メディアに露出するためには，高い競技成績が必要であり，優秀なアスリートの獲得が重要となる。そこで各大学運動部の監督・コーチ・OB はスポーツ推薦制度や奨学金，トレーニング環境を武器に一人でも多くの優秀なアスリートを入学させるべく激しいリクルート活動を行なっている。また，多くの大学がスポーツ学人気に伴いスポーツと名のついた学部や学科を新設し，スポーツ推薦以外のルートでもこれまで以上に大学生アスリートが入学しやすい環境を整えている[9)]。これらの状況は，大学生アスリートにとって一見優位に働いているようにも見える。しかし，大学に入学してきたアスリートに対する指導・教育は現場の指導者に一任されている事が多く，大学側が，大学教育の一環として，直接関与することはほとんどない[10)]。友添[11)] は，スポーツ推薦制度によって大量に入学してくる学生の受け皿としての就職先の減少や大学と企業が連携しながら支えてきた日本型トップアスリート養

成システムの崩壊を挙げ，アスリートの「使い捨て」を前提としている現状を指摘している。つまり，スポーツを利用した大学入学への間口は広がっても，大学卒業後の出口が広がらないという現状があることで，卒業後の進路は非常に厳しいものともいえよう。

先述した競技の高度化や経済の低迷，大学のブランド戦略といった環境変遷により，大学生トップアスリートの学業や就職活動に停滞が生じ，卒業後のキャリア形成が円滑に進まないという状況は，非正規雇用者や無業者（フリーターやニート）に代表される雇用不安定の増加といった社会的に顕在化している問題とも繋がる。加えて，大学生トップアスリートの多くは，各競技団体が実施する一貫指導プログラムの中で強化された競技者が多く存在しており，多額の国費が注ぎ込まれている。世界を相手に戦い，トップレベルの競技経験で培った知識や経験を競技引退後も社会に還元し，スポーツ振興や日本経済の発展に寄与することは競技団体の経営という観点からも重要な課題である。また，経営戦略としてスポーツに力を注ぐ各大学にとっても，間口が広がり大量に入学してくる大学生トップアスリートが就職できないという現状は，大学の経営面でも負の材料になる可能性が高い。

この様に，大学生トップアスリートは，大学卒業後の就職に関して大きな困難を抱えているが，我が国においては，大学生トップアスリートのキャリア問題に関する研究や調査は未だほとんど行われていないのが現状である。一方，海外，特に米国においては，コミュニケーションスキルや目標設定スキル，ソーシャルサポートの探求，ポジティブシンキング等の多様なスキルから構成される「ライフスキル（Life Skills）」という概念に着眼し，アスリート等を対象とした「ライフスキル教育プログラム」が開発されている[12]。また，実際にそのプログラムの実践[13]を通じて，アスリートの競技引退後のキャリア形成を視野に入れた生涯発達的支援が行われている。

このライフスキルに関して，体育・スポーツ心理学領域では，体育授業や運動部活動におけるスポーツ経験が，ライフスキルの獲得に正の影響を及ぼしていることを示唆する報告が多数ある[14–18]。このライフスキルは，21 世紀における教育の基本目標である「生きる力」に極めて類似した概念としても国内では位置づけられている[17,19]。また，「日常生活の中で生じるさまざまな問題や要求に対して，建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」[20]というライフスキルの定義からは，アスリートが獲得していると考えられるライフスキルが，大学生トップアスリートのキャリア形成を促す要因の 1 つとなることが期待されるだろう。

そこで，本研究では，大学を卒業したばかりのトップアスリートに対してアンケート調査を実施し，アスリートにおけるライフスキル獲得の重要性を示す資料を得ることを目的とした。具体的には，就職が決定している個人と未決定の個人のライフスキル獲得レベルを比較し，有意な差が見られるかを検証する。仮説としては，ライフイベント（人生における重大な出来事）とも言える就職活動を乗り越えた前者の方がライフスキルの獲得レベルは高いと予測される。また，どのようにして就職活動を行ったかという情報も収集し，ライフスキルの獲得と就職活動の形態との関連性についても検討を行う。

2. 方　　法

1）調査協力者

東京，神奈川に所在する私立大学（東日本学生レスリング連盟 1 部の 5 大学，1 大学あたり 4–5 名）に所属し，2011 年の 3 月に大学を卒業した男子レスリング選手 24 名（平均年齢 22.0 ± 0.2 歳）である。いずれも全日本学生選手権レベル以上の大会で優秀な成績を収めており，高度なレベルで競技を行ってきたトップアスリートである。

2）調査時期と手続き

事前に各大学レスリング部の監督，コーチに対して調査の趣旨説明を行い，調査協力の許可を得た上で 2011 年の 3 月から 4 月にかけて行われた。アンケート用紙は本研究者が各大学のレスリング道場を訪問し，調査協力者に十分な説明を行った後に配布し，集合調査法実施後その場で回収した。また，調査自体は記名式により実施された。

3）調査内容

就職に関する項目：調査実施時点における就職決定の有無と，就職決定者には 6 つの就職活動の形態（①自らの競技経験を生かせる職業に焦点を絞り就職活動を行った，②幅広い職業を対象として就職活動を行った，③何らかのコネクションを利用した，④ OB のコネクションを利用した，⑤家業を継いだ，⑥その他）から該当する 1 つを選択してもらった。

ライフスキル評価尺度：島本ほか[21]が現場の指導者の実践的な経験をもとに開発した尺度で，アスリートにおけるライフスキルを，「悩み解消（例：悩み事はきちんと話を聞いてくれる人に打ち明けている）」，「目標設定（例：目標を達成するための計画を具体的に立てている）」，「考える力（例：あれこれと指示を受けなくても，次にどうすればよいか考えることができる）」，「感謝する心（例：お礼の言葉は，はっきりと声を出して伝えている）」，「コミュニケーション（例：同学年だ

けでなく，先輩や後輩，指導者ともうまく付き合っている)」,「礼儀・マナー（例：感情的な挑発行為や言動は行わない)」,「最善の努力（例:単調な作業の繰り返しでも，地道に取り組むことができる)」,「責任ある行動（例：同じような失敗を二度繰り返さないようにしている)」,「謙虚な心（例:いつも自分が絶対に正しいとは思わないようにしている)」,「体調管理（例:適度な睡眠をとり，次の日に疲れを残さないようにしている)」という計 10 側面から評価することができる（1 側面 4 項目)。項目の評定は「1：ぜんぜん当てはまらない，2：あまり当てはまらない，3：わりと当てはまる，4:とても当てはまる」という 4 段階の自己評定で行い，評定値が高いほどスキルの獲得レベルが高いと解釈される。回答に際しては,「競技場面を含めた日常生活全体における様子についてお聞きします。以下の各項目について，現在の自分に最も当てはまる選択肢の数字 1 つに○印を付けて下さい」という教示を行い，調査実施時点における様子について回答してもらった。

4）統計処理

就職決定群と未決定群を対象とした対応のない 2 変数の t 検定を行い，就職決定の有無によるライフスキル各側面の獲得レベルの差を検証した。また，就職決定群においては，就職活動の形態に着目した一要因の分散分析を行い，形態によるライフスキル各側面の獲得レベルの差を検証した。すべての分析には統計ソフトの SPSS Statistics 17.0 を使用し，有意水準は 5% とした。

3. 結　　果

1）t 検定の結果

表 1 には就職決定群（15 名）と未決定群（9 名）における，ライフスキル各側面の基本統計量と t 検定の結果を示している。仮説として，就職決定群の方が未決定群よりも全体的にライフスキルの獲得レベルが高くなることが予想されたが，いずれの側面においても有意な差は認められなかった。

2）就職活動の形態からみたライフスキル各側面の分散分析の結果

表 2 には，就職決定群における就職活動の形態の分類を示している。それによると,「OB のコネクションを利用した」と「家業を継いだ」に該当する個人は見られず, 分析自体は「その他」の 1 名を除いた 14 名を対象として行った。その結果,「感謝する心」と「礼儀・マナー」,「責任ある行動」において主効果が認められ，Tukey 法による多重比較の結果からは，いずれの側面とも，形態①の群は形態③の群に比べ有意にスキルの獲得レベルが高いことが示された(表 3)。また，分析の対象とした 3 つの形態において，形態①と形態②に比べ，形態③は就職活動としての難易度は低下すると考えられることから，ライフスキルの獲得レベルが高い個人ほど難易度の高い課題に挑戦し，就職を獲得していることが示唆された。

以上の結果，キャリア形成という就職決定の有無からはライフスキル獲得の重要性を客観的に明らかにすることはできなかったが，就職活動の形態という，困難な課題へと向こう行動様式においては，ライフスキ

表 1　就職決定の有無からみたライフスキル各側面の t 検定の結果

	就職決定 (n=15)		未決定 (n=9)		t値	p値
	平均値	SD	平均値	SD		
悩み解消	12.47	3.11	11.22	3.38	.92	.37
目標設定	10.07	3.35	9.22	1.92	.79	.44
考える力	12.00	2.07	12.67	2.55	.70	.49
感謝する心	14.07	2.05	14.22	1.64	.19	.85
コミュニケーション	12.53	2.00	12.78	2.59	.26	.80
礼儀・マナー	12.07	2.69	13.00	2.65	.83	.42
最善の努力	12.33	3.06	12.44	2.65	.09	.93
責任ある行動	12.40	2.82	13.67	1.32	1.25	.22
謙虚な心	11.60	2.64	13.56	1.74	1.97	.06
体調管理	11.07	2.55	10.44	2.60	.58	.57

注 1）ライフスキル各側面の得点範囲はいずれも 4–16
注 2）t 値の自由度は 22

表 2　就職決定者における就職活動の形態

就職活動の形態	人数
①自らの競技経験を生かせる職業に焦点を絞り就職活動を行った	5
②幅広い職業を対象として就職活動を行った	5
③何らかのコネクションを利用した	4
④OBのコネクションを利用した	0
⑤家業を継いだ	0
⑥その他	1
計	15

表 3　就職活動の形態からみたライフスキル各側面の分散分析の結果

	形態①（n=5）		形態②（n=5）		形態③（n=4）		F値	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
悩み解消	13.00	1.73	13.40	3.44	11.25	4.43	.53	
目標設定	9.60	3.58	10.20	3.9	11.00	3.46	.16	
考える力	13.40	2.07	12.00	1.23	10.50	2.38	2.56	
感謝する心	15.60	.89	14.40	1.52	12.00	2.31	5.68*	③＜①
コミュニケーション	13.40	1.95	13.00	2.24	11.00	1.41	1.90	
礼儀・マナー	14.20	2.17	11.80	2.17	9.50	2.08	5.37*	③＜①
最善の努力	13.80	2.39	12.40	2.41	9.75	1.84	2.34	
責任ある行動	14.40	1.14	12.40	2.51	9.75	3.30	4.19*	③＜①
謙虚な心	13.20	2.28	10.40	2.30	10.25	2.36	2.48	
体調管理	12.40	2.51	10.00	2.45	10.00	1.08	1.61	

注 1）形態①：自らの競技経験を生かせる職業に焦点を絞り就職活動を行った
　　形態②：幅広い職業を対象として就職活動を行った
　　形態③：何らかのコネクションを利用した
注 2）F 値の自由度はいずれも 2，11
注 3）* p<.05

ル獲得の効果が示唆される結果となった。以下では，それぞれの分析結果について考察を行う。

4. 考　　察

1）就職決定群と未決定群のライフスキル獲得レベルの比較

就職決定群と未決定群でライフスキルの獲得レベルに差が見られなかったのは，調査を実施したのが就職活動後であったことが関係していると考えられる。就職決定群のライフスキルの獲得レベルが，この先の進路に一定の目途が立ったことで一時的に低下したのか，反対に未決定群の獲得レベルが，今後も引き続き努力が必要であるために向上したのかの，どちらかのケースではないかと考える。今後は，まず，就職活動が開始される前にライフスキルのデータを収集し，同一の調査対象者に大学卒業時に再び調査を実施することで，事前のライフスキルの獲得レベルが就職決定の有無にどのような影響を与えるのかを厳密に検証していくことが必要であろう。また,「謙虚な心」において両群の平均値の差が最も大きく（t(22)=1.97, p 値 =.06），未決定群の得点が高い結果となったが，就職状況の厳しさが,「たとえほめられたとしても，いつまでもその事で浮かれることはない」,「過去の栄光や成功にいつまでもとらわれないようにしている」という「謙虚な心」の獲得を促している可能性が示された。

2）就職決定群における就職活動の形態

今回の調査協力者には，全日本選手権優勝者や国際大会に日本代表選手として派遣される等，大学卒業後も競技を継続する非常に高度なレベルの競技者を数名含んでいる。これらのトップアスリートは，主に形態①を選択しており（5 名中競技継続者 4 名），自らの競技経験を生かすことのできる職業（スポンサー，警視庁，自衛隊，大学教員等）に就くためには，日本代表に選出されるなどの高い競技実績が求められる可能性がある。また，形態④の該当者がゼロという結果は，

以前のように体育会 OB のコネクションを利用して職業を得ている個人が少ないこと，すなわち，現在における大学生トップアスリートの就職状況の厳しさを反映していると言えるだろう。

3）就職活動の形態からみたライフスキル各側面の分散分析の結果

形態①の群は，全体的にライフスキルの獲得レベルが最も高い傾向にあった（表 3）。先述のように，形態①の群は非常に高度な競技実績を持ち大学卒業後も競技を継続する，競技へのコミットメントの高い個人の集まりと言える。先行研究[17]においても，競技に対するコミットメントが高い個人ほどライフスキルの獲得レベルが高いことが報告されている。また同様に，競技レベルが高いほどライフスキルの獲得レベルも高いことが示されているため[14]，本研究の結果はこれら先行研究の知見を支持するものと言えるだろう。

形態②の群も，形態①の群と同様に自らの力で一から就職活動を行った群である。ライフスキルの獲得レベルでは全体的に形態①の群を下回るものの，競技活動で就職活動を十分に行うことができない環境ながらも，チームメイトや指導者等に相談に乗ってもらうことで適切に悩みや不安を解消し，目標設定によって動機づけを高め，自分自身の力で就職を獲得した群だと考えられる。形態①の群と合わせ，今後，彼らがどのようにキャリアを歩んでいくのか，また，その過程におけるライフスキル獲得レベルの状態はどのようなものなのかについて，定期的に追跡調査を実施し注視していくことが望まれる。

形態③の群は，形態①の群に比べて，「感謝する心」と「礼儀・マナー」，「責任ある行動」において有意にライフスキルの獲得レベルが低かったが，正確には「目標設定」を除き，全体的にライフスキルの獲得レベルは 3 群の中で最も低い傾向にあるととらえるべきであろう。その背景には，自らの力のみで就職を獲得していないことから，その後の職業生活に対する不安が影響を及ぼしている可能性がある。コネクションの利用自体は，困難な課題を克服する上での行動様式の 1 つであると考えられるが，そのことが今後のライフスキルの獲得，自らのキャリアの発達にどのような影響を与えるのかについては未知数である。引き続き，注意深く観察をしていく必要があるだろう。

4）今後の課題

最後に，本研究における今後の主な課題について述べる。本研究では，1 時点の横断データをもとに検討を行ったが，今後は，トップアスリートのキャリア形成，キャリアトランジションとライフスキル獲得との関係を，縦断データをもとに詳細に検討していく必要がある。具体的には，大学生トップアスリートに対して長期縦断調査への協力を依頼し，年間を通じたライフスキル獲得レベルの変化の様子を明らかにしながら，その過程でのライフスキルとキャリアのあり方（就職，転職，昇進など）との関係を明らかにしていくことが求められよう。そのような長期的視野に立った検討が，大学生トップアスリートにおけるライフスキル獲得の重要性，さらにはキャリア形成，キャリアトランジションを促す支援のあり方を明らかにすることにつながると考えられる。

5. 文　　献

1) 筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト；トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのカリキュラム開発 1. 2006.
2) 筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト；トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのカリキュラム開発 2. 2007.
3) 筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト；トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのカリキュラム開発 3. 2008.
4) 清水聖志人・高橋義雄・河野一郎；大学運動部の指導・運営内容差による就職状況の比較―レスリング競技者を対象として―. スポーツ産業学研究 20: 119–129. 2010.
5) 加野芳正；キャリア支援の多様性―大学におけるキャリア支援のアプローチ―. 広島大学 RIHE101: 1. 2009.
6) 厚生労働省；平成 22 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査. http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000weq7.html.
7) 上柿和生；企業スポーツ休・廃部の変遷. スポーツアドバンテージ・ブックレット 3: 76–91. 2009.
8) 友添秀則；大学スポーツを取り巻く問題. 現代スポーツ評論 14: 10. 2006.
9) 岡本純也；大学運動部の現在. 現代スポーツ評論 14: 36–45. 2006.
10) 津田忠雄；大学教育とスポーツ競技を通じての教育―大学生アスリートとライフスキル教育プログラムの展開―. 近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要 6: 1–13. 2007.
11) 友添秀則；大学スポーツを取り巻く問題. 現代スポーツ評論 14: 11–12. 2006.
12) Danish, S. J.; In: Gatz, M., Messner, M. A. and Ball-Rokeach, S. J. (Eds.) Paradoxes of youth and sport. Teaching life skills through sport. pp. 49-60, State University of New York Press: Albany, NY. 2002.
13) Papacharisis, V., Goudas, M., Danish, S. J., and Theodorakis, Y.; The effectiveness of teaching a life skills program in a sport context. Journal of Applied Sport Psychology, 17: 247–254. 2005.
14) Murakami, K., Tokunaga, M., and Hashimoto, K.; The relationship between health-related life skills and sport experience for adolescents. Human

Performance Measurement, 1: 1–14. 2004.
15) 島本好平・石井源信；体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に与える影響―運動部所属の有無からの検討―．スポーツ心理学研究，36(2): 127–136. 2009.
16) 島本好平・石井源信；運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定．スポーツ心理学研究，37(2): 89–99. 2010.
17) 上野耕平；運動部活動における生徒のライフスキル獲得とコミットメントの関係．日本スポーツ教育学会第 20 回記念国際大会論集：155–160. 2001.
18) 上野耕平・中込四郎；運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究．体育学研究，43: 33–42. 1998.
19) 川畑徹朗；健康教育とライフスキル学習の新提案―個性を伸ばし，自己実現を支援する―．学校運営研究，36(9): 14–17. 1997.
20) WHO；川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也監訳 WHO ライフスキル教育プログラム．大修館書店：東京．1997.
21) 島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信；アスリートにおけるライフスキル評価尺度開発の試み．日本スポーツ心理学会第 37 回大会研究発表抄録集：30–31. 2010.

〈連絡先〉
著者名：清水聖志人
住　所：東京都世田谷区深沢 7-1-1
所　属：日本体育大学スポーツトレーニングセンター
E-mail アドレス：seshitoshimizu@nittai.ac.jp